

国立歴史民俗博物館編

『ドキュメント災害史1703―2003』

―地震・噴火・津波、そして復興―

竹内 勇造

本書は、国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）開館二十周年記念展示「ドキュメント災害史1703―2003」展の図録である。本展は、歴博が二〇〇〇年に初めて広く館外の研究者に公募した企画であり、日本における江戸時代からの大きな災害を理系研究者と文系研究者が二年間共同研究した「歴史資料と災害像―歴史災害から何を学ぶか―」の成果である。展示においては、目玉となる「お宝」を集めて集客を図る従来型の展示ではなく、高い研究レベルと強いテーマ性を押し出し、展示の工夫によって観客動員を高めようとする点でも新しい大胆な挑戦を試みている。そして、本展の二十余名の展示プロジェクト委員の代表者北原糸子氏は歴博の外部の研究者であり、委員の一人として、本会会長の長谷川成一氏が参画している。

本書は総論のあと、大きく「第Ⅰ部 日本の歴史にみる自然災害」「第Ⅱ部 再生への道」の二部構成となっており、第Ⅰ部が「一、地震」「二、噴火」「三、津波」、第Ⅱ部が「四、再生」という全部で四つの章から成り立っている。本書が取り上げるのは、多くの絵図や記録が残された歴史的な大災害である。共同研究において歴史学に要請されたのは、資料発掘の手法や信頼に足る資料であるか否かの鑑識眼であり、

災害を克服し社会回復を行う人間や社会に関する研究である。

次に、本書の概要及びその特色を紹介したい。

総論では、わが国に地震、火山災害、津波が多い理由が述べられた後、本展の展示が日本の歴史系博物館にとつて新たな冒険であること、「象潟図屏風」ともう一点が超精細なデジタル画像データとして大型ディスプレイ上に展示されていることが紹介される。

第I部に移つて、弘化四年に発生した善光寺地震は、内陸直下型地震で、土砂崩壊による水害や土石流などの二次被害が発生して広範囲の被害をもたらした。震災から三〇四年後に、松代藩のお抱え絵師によつて山崩れの様子が写實的に描かれ、その絵図と百五十年後の現在の姿と比較できることが絵図と写真を併置する形で三頁にわたり示される。

安政五年の飛越地震においても、急峻な山岳地帯に発生した地震が大規模な山崩れによる土砂災害を引き起こした。崖崩れによつて川が堰き止められて新しく湖が生じ、やがてそれが決壊して下流部に大きな洪水被害をもたらしたのである。

元禄十六年の元禄地震と大正十二年の関東地震はともに海溝型巨大地震であつたが、関東地震では直後の大火災が死者・行方不明者数をふやし被害を大きくした。安政二年の安政江戸地震は内陸直下型地震であつたが、これら三つの地震の震度分布図が作られた結果、分布は関東地震によく似ていて、地盤条件が揺れの強さに大きく影響していることがわかつた。関東地震と安政江戸地震の東京各地における地震被害の様子が、写真と絵図を対比する形で紹介される。(第一章)

富士山の宝永噴火(宝永四年)では、大量の火山灰や砂を吹き上げ、

江戸にまで灰を降らせた。幕府は、被害の著しい大名・旗本領は替地にすることにし、また、全国の大名・旗本領から石高百石につき金二両ずつ徴収したが、被災地救済に使われたのはその一部にすぎなかつた。被災地・小田原藩の対応は、一揆等の村人の反発を招かないように、お救い米を支給したり、砂の取り除きを約束したりというものであり、積極的な対応ではなかつた。

雲仙普賢岳の寛政噴火(寛政四年)では、古い溶岩ドームが大崩壊して、大量の土石が有明海に押し出され、大津波を生じた「島原大変肥後迷惑」と呼ばれる災害が発生した。多くの住民が崩れた土砂や岩石に生き埋めとなり、また津波に溺れて死者・行方不明者は一万五千人にも達した。島原藩領から佐賀藩領へ避難してきた者には、米・味噌・薪などの援助が与えられ、藩を越えた災害救助活動が行われていた。

浅間山の天明噴火(天明三年)では、大規模な軽石・火山灰の降下に続いて火砕流が噴出し、高速の土石なだれや泥流が引き起こされ、複合的な大規模火山災害となつた。鎌原土石なだれは、鎌原村を埋没させた後、吾妻川に流入して天明泥流となり、吾妻川や利根川沿いに死者千四百人以上を出した。最激甚被災地であつた「日本のボンベイ」鎌原村は、被災後三十年を経ても復興はまだ思うように進まなかつた。(第二章)

日本は海洋プレートの沈み込み帯に位置しているため、地震や火山の噴火が多く、それに伴つて津波も頻発している。津波の複雑なメカニズムについてはCGやグラフによつてわかりやすく示されている。地震や洪水に比べると発生頻度の少ない津波ではあるが、その強大な破壊力は恐ろしく、明治三陸大津波(明治二十九年)では二万人以上の犠牲者を

出した。

被災者もろとも奪い去ってしまう津波の性質上、残される記録は少ないが、盛岡藩士の家に生まれた山奈宗真は、測量学などを駆使して明治三陸大津波を精密に調査した。安政元年の安政東海地震津波では下田に停泊中のロシアのディアナ号が被害を受けたが、当時の日本人とは異なる時間感覚で災害が記録された点で貴重である。

明治二十九年に続き昭和八年にも大津波の被害を受けた岩手県田老町の被災の様子は、図録の表紙写真にも使われており、人家が跡形もなく消えてしまったその惨状は津波の凄まじい破壊力をわれわれに思い知らせる。現在の津波防災対策としては、防潮堤、水門、建物のピロティ方式化などのハード面と、津波警報、避難対策などのソフト面がある。

### （第三章）

さて、第四章「再生」は災害の「その後」を扱うものであり、本書の中でも最も歴史学の比重の大きい部分である。最近十年間に日本列島で発生した大災害——とりわけ阪神・淡路大震災——からの復興の過程に学んで、歴史災害のその後を、より現実根ざした資料の読み取り方で理解しようとする、歴史学の側からの新たな挑戦である。

まず取り上げられるのが、長谷川氏が参画した象潟地震とその後の景観闘争である。文化元年の象潟地震は、日本海沿いの名所として名高かった潟を隆起させ、芭蕉が奥の細道紀行で詠んだ名句の景勝も失われてしまう事態となった。この景観変化に対し、本荘藩は隆起した土地を耕地化し、収穫を増やす方針を打ち出した。名所象潟の景観の一部とまでなっていた地元の蚶満寺は、この方針に反対し、京都の閑院宮家を立て

て景観保持の政治運動を起こした。景観保全を巡る蚶満寺对本荘藩の戦いが非常に興味深く展開し、特に時の藩権力に果敢に抵抗した蚶満寺寛林和尚の活躍ぶりに目を見張らされる。長谷川氏の『失われた景観』（平成八年、吉川弘文館）でご存じの方も多いと思う。

善光寺地震で本堂が倒壊した牟礼村證念寺では、富くじ興行によって再建資金を集め、本堂を再建した。稲荷山村では震災によって人口は減ったものの、嫁取り、婿取りによってイエは存続させ、村や宿の機能を保持させるという知恵が見られる。同村が地震による出火で消失していた様子が、絵図と文書に基づきCGで復元され、延焼がどのような経過をたどったかが非常にわかりやすく示されている。宿場町の機能の早急な回復が必要とされたため、一般の村よりは復旧資金を早く得られる条件を持っていたものの、震災からの復興は困難な道のであった。

安政江戸地震の後、地震の元凶とされた鯨の絵が描かれたかわら版や錦絵が大量に出回った。人々は鯨を押さえつける鹿島大明神に加護を求め、鯨をこらしめる絵を見て不条理な災害に対するやり場のない怒りを発散させることで気力の回復を図った。これは、現代であればPTSD（外傷後ストレス障害）等の災害、事故等の精神的後遺症を扱うところのケアの問題である。江戸地震後の特殊な社会現象である「鯨絵」は、災害の元凶から死者との別離までさまざまな役割を担いつつ、再生へ向けての大きな役割を果たしたのである。

阪神・淡路大震災（平成七年）は、いま現実に復興の努力が重ねられている災害である。ボランティアを写した写真等により、現代における救済を位置付けて、歴史災害を逆照射するための災害という意味での展

示が行われた。

以上長めの紹介となった。理系は災害側から人間社会を見、文系は人間の側から降りかかる災害を見ている。災害史研究の文理統合化の可能性を探る展覧会となったと言えよう。本展及び本書は双方の特徴を活かしている。その展示までの議論の過程や展示プロジェクト委員の考え及び展覧中の状況をも、できるだけ一般の人に公開している点は高く評価されるべきである（本書十一頁「展示通信」の紹介及びウェブサイト上の同通信参照）。

自然科学系の博物館等の図録類に英文翻訳が併記されるのはよく見られるところではあるが、本書では、すべての図版と、総論部及び各章の総論部分に見やすく翻訳が付され、広くこの共同研究の経験を海外にも分かとうという意気込みが感じられる。また、歴博のウェブサイト内の本展紹介ページも、きわめて充実した内容である。特に、西谷大氏による「展示の文法」は私のような博物館に関わる者にとって刺激となるものである。本書とともにウェブサイトもあわせて活用されたい。

（A4判、一六七頁、歴史民俗博物館振興会、二〇〇三年六月刊、

一一〇〇円）

（たけうち・ゆうぞう 弘前市立博物館主査）